

日本特別ニーズ教育学会第24回研究大会 開催報告

2018年11月16日・17・18日の3日間、大阪体育大学（大阪府泉南郡熊取町）にて、日本特別ニーズ教育学会第24回研究大会を開催しました。今回の大会では、本学会が大切にしてきた「特別ニーズ教育」を、現在の子どもが抱える発達困難や支援ニーズを通して再考するプログラムを複数企画しました。



その一つとして、本大会では11月16日に特別プログラムとしてスタディ・ツアーを企画し、大阪少年鑑別所・法務少年支援センターの見学、貝塚市立東小学校での授業参観・ミニ講演・シンポジウムを通して、特別ニーズ教育学を「現場」で探る取り組みを試みました。さらに、体育大学の特色を活かしたワークショップ「車いすハンドボール・ボッチャ体験講習会」と大体大キャンパス内交流合宿も若手参加者を中心に盛り上がりました。

ギュッと詰まった3日間に約240名の参加があり、実行委員会企画「公開教育講座」、実行委員会企画「シンポジウム」2テーマ、ラウンドテーブル6テーマ、理事会企画「課題研究」2テーマ、理事会企画「若手チャレンジ研究会」、「自由研究発表」演題28件、理事会企画「卒論等デザイン発表会」演題7件が企画され、学会賞授賞式・受賞者講演も執り行われて、盛会のもとに終了することができました。



6月に開催の中間集会同様に、本大会も非学会員や学部生・院生等の若い方々の参加が半数以上を占め、分野や所属を超えて研究交流する参加者の姿が会場に散見されたことが特徴的です。また、岸和田城の壕端に佇む2,400坪を越す広大な敷地のお屋敷「がんこ岸和田五風荘」で開催した懇親会には50名が参加し、笑いと話の絶えない賑やかな2時間半となりました。

した。

「子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えるのか」というテーマのもとに中間集会と本大会を繋いだ各種の議論のなかで、「当事者にとって『辛い所に手が届く』支援は、ある種のおせっかいの向こう側にあるのではないか。特別ニーズを有する子も親も教師も支援者も学校も地域も『当事者』であり、彼らをエンパワメントしながら孤立させないことが、発達を支えていくために不可欠な基本」ということを改めて考える機会となりました。



各プログラムの報告は、ニュースレターにも掲載予定です（ニュースレターは学会ウェブサイトに掲載します）。本報告では実行委員会企画の一部を中心にお伝えします。

実行委員会企画「特別ニーズ教育学を現場で探るスタディ・ツアー」。11月16日午前には大阪少年鑑別所・法務少年支援センターの見学ツアーを開催し、40名の参加がありました。

本企画は、法務省矯正局少年矯正課と大阪矯正管区の全面的なご協力・ご支援のもと、16日午前企画および17日午後企画を連動企画として、矯正教育の現場から多様な立場の方々と特別ニーズ教育学を巡る企画です。施設紹介、現在の少年非行の動向や法務少年支援センターの地域援助の取り組み、学校教育等との連携についてのミニレクチャーを伺い、施設見学と合わせて、参加者の皆さんからの質問等も多く寄せられ、特別ニーズ教育学を深めることができました。

午後は、貝塚市立東小学校に会場を移し、授業見学、高橋代表理事によるミニ講演のあと、「子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えるのか—学校と家庭、地域が連携して子どもを支えるには—」というテーマのもとシンポジウムを開催し、学校教育の現場から多様な立場の方々と共に特別ニーズ教育学を探りました。貝塚市教育



委員会と貝塚市立東小学校の全面的なご協力とご支援のもとに実施しましたが、貝塚市の全小学校・中学校の特別支援教育コーディネーター研修および貝塚市立東小学校全教職員研修も兼ねており、約90名の参加がありました。

シンポジウムでは、東小学校コーディネー

ターの葭川先生より話題提供をいただき、シンポジストの東小学校校長・深井先生、大阪少年鑑別所・法務少年支援センターの小林氏・藪内氏、高橋代表理事、加瀬副代表理事とともに、授業参観・基調講演の内容を踏まえながら、子どもが安心・安全に生きることができる生活基盤、大人になっていくために不可欠な成長・発達の条件・環境の保障から排除された子どもの「育ちと発達の困難」という視点から、多様な生きづらさを抱える子どもの支援ニーズの把握や関係機関・家庭・地域等との連携と支援のカギを探りました。

次の世代の育成や教育を考えていくためには、学校・教育委員会・学会、学校教育・矯正教育・福祉のように、特別ニーズ教育学・特別支援教育と現場や多分野がつながって、研究交流していくことが重要であることを参加者一同で再確認できました。こうした取り組みを 25 年前から目指してきた本学会にとって、今回の取り組みが大きな財産になったとともに、子どもが安心・安全に成長・発達していくために今後も積み上げ、発展させていくことへの機運も高まりました。来年、学会創設 25 周年を迎える本学会にとって、次のステージのあり方を考える機会となりました。

11 月 17 日は朝早い時間にもかかわらず、多くの参加者がおいで下さいました。幕開けは長野パラリンピック金メダリストのマセソン美季氏（日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部／国際オリンピック委員会・パラリンピック委員会教育委員）による講演です。

マセソン氏の歩みや生活のお話しを通して、未だ多くの国で障害者に対する差別や偏見が存在しているが、「Impossible も見方や考え方を変えたり、工夫すれば、I'm possible に変えることができる」と力強くご講演いただきました。パラリンピックという言葉は知っていても、観戦したことがある人や、競技の細かいルールまで知っている人はごく僅かななか、公開教育講座では、パラリンピックの歴史や発展、選手たちをサポートする用具とその進化、公平性を担保するルールに隠された工夫、オリンピックを上回る記録など、多様な視点からパラリンピックの魅力もご紹介いただきました。



続いて実行委員会企画シンポジウムⅠは「子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えるのか—学校と家庭が連携して子どもを支えるには—」と題し、学校と家庭の連携に注目しました。特別支援教育が制度化されて 11 年が経過し、支援体制の整備や教育実践の蓄積が進められる中で、障害・疾患にとどまらず、多様な発達上の課題・困難と支

援ニーズを有する子どもの存在が明らかになってきました。障害・病気、学校不適応、不登校、家庭の養育困難、非行等の一人ひとりの発達上の課題・困難を早期に発見し、個々の支援ニーズに即した発達支援を行なっていくには、学校と家庭が互いに捉えている子どもの姿や願い、課題を共有し、連携していくことが不可欠です。

一方、多様な発達上の課題・困難と支援ニーズを有する子どもの保護者は、子育てを通して、親自身も悩み、戸惑い、苛立ち、周囲にそのことを相談できずに寂しさや孤立感、疎外感などを抱いている例が少なくありません。また、子どもの様子が気になっていても、すぐに発達上の課題・困難と支援ニーズとしてとらえることは難しく、相談・支援機関に繋がるまでに長い時間を要したり、学校と家庭の連携の際に「ズレ」が生じることも少なくありません。

日頃の教育実践や家庭・保護者・地域との関わりについて、子どもや保護者の声・姿を聞かせていただきながら、多様な発達上の課題・困難または「生きづらさ」と支援ニーズを有する子どもを支援していくために、「家庭と学校」が「子どもの発達支援ニーズをどのように受け



止め、支援・協働していくのか」を、学校教育・支援者と保護者の視点から議論を深めました。



止め、支援・協働していくのか」を、学校教育・支援者と保護者の視点から議論を深めました。

シンポジウムⅡでは「子どもの発達支援ニーズをどのように受け止め、支えるのか—多様な生きづらさから子どもの発達ニーズと支援の鍵を探る—」と題し、現代の急激な社会構造の変化、家庭の経済的格差や養育困難の拡大のなかで、喫緊の課題となっている「不安・緊張・恐怖・抑うつ・ストレス」等が複雑に絡み合い、自律神経失調症、心身症、うつ、自殺、自傷、不登校・ひきこもりなどの心身の発達困難、いじめ・暴力・被虐待、触法・非行などの多様な不適応を有する子どもへの支援について議論しました。これらの課題は決して特殊ではなく、子ども全体の問題としてとらえることや子どもの「育ちと発達の困難」の解消が第一義的な課題です。

子どもたちの置かれている状況は様々ですが、子ども・若者が多層的な発達困難に追い込ま

れていく現状のなかで、障害の診断・判定はないものの支援が必要な子ども、家庭の養育環境が不安定な子ども、児童福祉施設等入所の子ども、非行・触法等の課題がある子どもなど、抱える想いや生きづらさに気づかれにくい子どもたちが数多く存在します。

早期の介入・発達支援が届きにくい子どもを孤立させず、思春期・青年期に彼らが抱える「発達ニーズをどのように受け止め、支援していくのか」を、「リフレーミング」「つながる」「移行」の3つのキーワードとともに学校教育と他領域の協働の視点から議論し、深めました。

最後になりましたが、本大会にご尽力下さいました法務省矯正局少年矯正課、大阪矯正管区、大阪少年鑑別所・大阪法務少年支援センター、貝塚市教育委員会、貝塚市立東小学校、ご登壇の皆様、ご参加の皆様、大阪体育大学学生スタッフ・大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。第25回研究大会は長崎大学で開催します。また皆様にお会いし、議論の続きができることを願っています（文責：田部絢子）。

日本特別ニーズ教育学会 2018 年度中間集会 実行委員会
日本特別ニーズ教育学会第24回研究大会（大阪大会）実行委員会

実行委員長	後上 鐵夫	（大阪体育大学 教育学部）
副実行委員長	松崎 保弘	（大阪体育大学 教育学部）
実行委員	曾根 裕二	（大阪体育大学 教育学部）
実行委員	田部 絢子	（立命館大学産業社会学部）

